

DEUTSCHE
BACHSOLISTEN

HELMUT
WINSCHERMANN

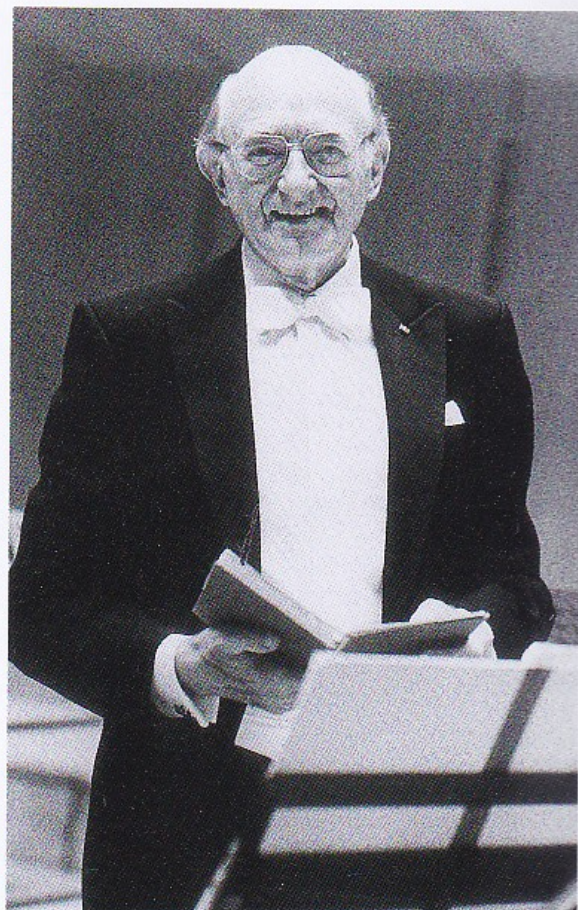


JAPAN ● 1998

Message

日本への演奏旅行は、ドイツ・バッハゾリストエンと私にとって、いつも何か特別な感じがします。ヨーロッパ各地でも数々のコンサートを行っていますが、バッハゾリストエン結成38年に当たる今年、日本の聴衆の皆様にお会い出来るのを殊の外、楽しみにしています。音楽への感動を、ためらわず率直に表現する事の出来る日本の聴衆の方々から、バッハ音楽への愛のみでなく、私と私のアンサンブルに対しての、ほとんど“友情”とも思える好意的な暖かいものが伝わってくるのです。今回のツアーの主なプログラム「ブランデンブルク協奏曲」と「ミサ曲短調」は、数あるバッハ作品の中でも頂点をなすものですが、私達はこれらの傑作をもって、間もなく終わりを告げる20世紀のフィナーレを飾りたいと思います。

“明晰に、生き生きと、そして喜ばしく”
——をモットーとして、1960年以来、私は私のオーボエ演奏を通して皆様にバッハ音楽を届けてきました。指揮者としても、このモットーは何ら変わる事はありません。



ヘルムート・ヴァインシャーマン

DEUTSCHE BACHSOLISTEN
HELMUT WINSCHERMANN

message from Helmut Winschermann:

Eine Konzertreise nach Japan ist für die DEUTSCHEN BACHSOLISTEN UND FÜR MICH NICHTS BESONDERES: Trotz vieler Konzerte in Europa treten wir uns in 38. Jahr seit der Gründung der DBS ganz besonders auf unser japanisches Publikum. Die Beglückungsfähigkeit der Zuhörer zeigt uns nicht nur die Liebe zu Bach's Musik, sondern auch eine fast freundschaftliche Zuneigung zu mir und meinem Ensemble. Mit den "Brandenburgischen Konzerten" und der grossen "Missa" erreichen wir in diesem bald zu Ende gehenden Jahrtausend einen Höhepunkt aus Bach's musikalischen Schaffen.
"klar, frisch und frohlich". - unter diesem Motto habe ich den Japanern seit 1960 mit meiner "Oben Bach's Musik" nahegebracht. Als der nun "Dirigierende" Leiter der DBS hat sich daran nichts geändert.

Helmut Winschermann
Bonn, 1.8.1989

ドイツ・バッハゾリストエン

DEUTSCHE BACHSOLISTEN



1962年に初来日した折のドイツ・バッハゾリストエンの演奏は、そのメンバーの豪華さと相まって、いまだに語り草となっている感動的なものだった。以来、翌1963年にはクルト・レーデル他のメンバーで来日、1965年、1970年、1974年には意欲的な『フーガの技法』をプログラムに加えてその絶妙な演奏が絶賛を博した。またその間1972年にはエリー・アメリングとのカンタータが「管と弦、そして声までが一つの音色感にとけあい、妙なる調和の世界をつくりあげた」と評され、常に生き生きとした躍動感に富むバッハの理想像の名演を披露してきた。その後も1976年、1980年、1983年、1985年、1988年、1991年、1993年、1995年と日本公演が続き、今回が15回目の来日となる。

このドイツ・バッハゾリストエンを組織したのは、オーボエの世界的名演奏家としても著名なバッハ研究の権威、ヘルムート・ヴィンシャーマンである。1960年、ドイツのウルム郊外のヴィプリングゲン修道院で定期的に開かれたフランクフルト・バッハ演奏会の芸術監

督も務めていたヴィンシャーマンは、これを母体に、毎年この演奏会のためにドイツ中から集まってくる第一級の優秀なバロック音楽の演奏家たちによる文字通りの“バッハ・ゾリストエン（バッハを得意とするソリストたち）”を結成した。したがって、メンバーは必ずしも一定せず、編成も弦主体だったり2管編成の木管が配されたり、12名から20数名まで自由に構成されている。しかし、常に指揮者ヴィンシャーマンの深い研究に基づく正統的な解釈による格調高い演奏は、メンバーの変動にもいささかも変わらず、「バッハにもっとも忠実に、明晰に、生き生きと、喜ばしく」というヴィンシャーマンのモットーどおり、世界中の人々の心に感動をもたらし、世界のバッハ演奏の規範となっている。

今回の日本公演は、1993年の『マタイ受難曲』、1995年の『ヨハネ受難曲』に続く、バッハ三大宗教曲シリーズの完結となる『ロ短調ミサ曲』と、ブランデンブルク協奏曲全曲演奏を含むオール・バッハ・プログラムでその真骨頂を披露する。

ヘルムート・ヴィンシャーマン

Helmut Winschermann

ルール地方ミュールハイムに生まれ、エッセンとパリで学び、ヘッセン（フランクフルト）放送交響楽団、コンサートヘボウ（アムステルダム）などのソロ・オーボエ奏者を務めた。その他、数々の室内楽団のリーダーを経て、1960年フランクフルトにおいてドイツ・バッハゾリステンを創立。以来、芸術監督として、今日まで30余年全責任を持ち、この室内楽オーケストラを独特のスタイルを持つアンサンブルに育て、特にバッハ演奏において世界的に権威ある演奏団体にした。ヴィンシャーマンは、オーボエを手にしても、指揮棒を握っても、ステージに立つときは、常に、「明晰に、生き生きと、喜ばしく」という彼のモットーを貫いてきた。

ドイツ・バッハゾリステンのメンバーは、初めからヴィンシャーマンの芸術と人格を慕って集まってくる、著名なオーケストラの首席奏者や音楽大学の教授である彼の友人たち、およびその優れた弟子たちで構成されている。年配者と若い世代がバランスよく混ざり、メンバーも一定でないために、マンネリ化が避けられ、常にフレッシュな空気がアンサンブルにもたらされている。

音楽監督としては、「フランクフルト・バッハ演奏会」（20年間）、ケルン・バッハ協会の「オーケストラ演奏会」（7年間）などを手掛け、1983年からはリューデンスシャイツ市で、市とドイツ政府の援助のもとに「リューデンスシャイツ・バッハ週間」を主宰している。ドイツ・バッハゾリステンを率いて、あるいは客演指導者として世界各地での演奏会のほか、地元のボンのベートーヴェンホールやケルンのプリュール城でも定期的にコンサートを開いている。

日本では、1962年以来ドイツ・バッハゾリステンの来日以外に、客演指揮者としていくつもの日本の合唱団やオーケストラを指揮

し、合唱を伴う教会音楽——バッハ『マタイ受難曲』『ヨハネ受難曲』『カンタータ』『クリスマス・オラトリオ』、ヘンデル『メサイヤ』など——でも、友人のクルト・トーマスに学んだ指揮法を駆使して特筆すべき成果を上げている。また、種々の音楽祭や講演で熱心な指導を行っており、日本の若い音楽家が彼から受けた影響は少なくない。

一世を風靡した名オーボエ奏者として知られる一方、ヴィンシャーマンは優れた教育者としても知られ、1956年デトモルト国立音楽大学の教授に就任。オーボエと室内楽のマスタークラスを受け持ち、「歌うオーボエ奏者」と称される彼のクラスには世界各地から学生が集まり、優秀な後継者が輩出した。ハンス・イエルク・シェレンベルガー（ベルリン・フィル）、宮本文昭（ケルン放送響）、インゴ・ゴリツキ（シュトゥットガルト国立音楽大学）、ゲルノート・シュマールフス（デトモルト国立音楽大学）、リヴィオ・ヴァルコール（フランクフルト放響）など、それぞれのオーケストラの首席オーボエ奏者または大学の教授として活躍している。

『ブランデンブルク協奏曲』『音楽の捧げもの』『フーガの技法』などのバッハのオーケストラ作品の大曲が近年のヴィンシャーマンのプログラムの中心を占めているが、その他に、モーツァルトのピアノ協奏曲、セレナーデ、バレエ音楽、メンデルスゾーンのバレエ音楽など、ますます意欲的にレパートリーを広げており、特にモーツァルトのレコード録音に対しては、最上の評価を得ている。

また、著名な作曲家、ギゼルヘア・クレーベは、ヴィンシャーマンとドイツ・バッハゾリステンのために『ストラヴィンスキーの墓』という曲を書き、献呈している。

最近の公演評は、彼のモダン楽器によるバッハ演奏を高く評価している。日本やヨーロ



ッパの大きなホールでは、モダン楽器を用いた方が聴衆はバッハの音楽をより理解することができるだろう。古楽器はすばらしいが、その魅力的な響きはヨーロッパの城にあるような小さなホールでこそ生かすことができる。ドイツ・バッハゾリストンのメンバーたちは古楽器の演奏にも通じている。ちょうどヴィンシャーマンが10年にわたってバロック・オーボエを演奏したように。

音楽学者でもあるヴィンシャーマンは、多くのバロック音楽の楽譜をジコルスキー社より出版、またレコードはドイツ・グラモフォン、ベーレンライター、フィリップス、RCAなどより50枚以上出している。なお、バッハゾリストン結成以前にバロック・オーボエも

演奏した彼は、ドイツで最初のバロック・オーボエによるレコード録音を行っている。近年では、CDでフィリップス、カプリチオ、インターコードなどよりバッハの協奏曲、ヘルマン・ブライ、エディタ・グルベローヴァとのカンタータなどがリリースされている。

ドイツ政府より最高の一等功労十字勲章、レコードに対して権威あるエディソン賞2回、グスタフ・マーラー賞、1991年度ドイツ・ヘンデル賞など、多くを受賞している。1992年ロンドンで王立音楽アカデミー委員会満場一致にて「名誉会員」の称号を授与された。

今年1月、ユネスコ本部からの依頼でパリにおいて『平和のためのチャリティー・コンサート』を指揮、絶賛を博した。

Helmut Winschermann / Deutsche Bachsolisten play modern Bach & Händel

ヘルムート・ヴィンシャーマン指揮ドイツ・バッハゾリストンのCD

バッハ:ブランデンブルク協奏曲

BWV1046-1051
直輸入盤・4,000 円(税込)



バッハ:ヨハネ受難曲

BWV245
ナミ・レコード・5,000 円(税込)



ヘンデル:合奏協奏曲集

Op.3(1-6)&「アレクサンダーの饗宴」
直輸入盤・2,000 円(税込)



※ 各会場ロビーにて販売いたします。

メンバー



マリエッタ・クラツ
(コンサートマスター、ソロ)
Marietta Kratz
(Concertmaster and Solo)

トーマス・ブランディス、ヨハン・クレバス、ルッジェーロ・リッチに師事。バーデン・バーデンのカール・フレッシュ・アカデミー首席卒業。1989年からNDR放送交響楽団コンサートマスター。



ヴォルフガング・クスマウル
(コンサートマスター、第1ヴァイオリン、ソロ)
Wolfgang Kussmaul
(Concertmaster, 1.Violin and Solo)

1975年よりドイツ・パッサウ・リッセンのメンバー。フェラス、コーガンに師事。シュトゥットガルト室内管弦楽団コンサートマスター。



クリスティアン・ハイネッケ
(コンサートマスター、第1ヴァイオリン)
Christian Heinecke
(Concertmaster, 1.Violin)

デュッセルドルフのロベルト・シューマン・オーケストラのメンバーであり、オスナブリュック管弦楽団のコンサートマスター。



クラウディア・レンツ
(第1ヴァイオリン)
Claudia Renz
(1.Violin)

デトモルト音楽大学でマイヤー＝シールニグ教授に師事。米国でも学ぶ。



ソーニャ・パハ
(第1ヴァイオリン)
Sonja Pacha
(1.Violin)

ケルン音楽大学で学ぶ。いくつかの室内オーケストラで活動。音楽教育も学んだ。



レギーナ・ライヒェル
(第2ヴァイオリン)
Regina Reichel
(2.Violin and Solo)

長年にわたりチューリヒ室内管弦楽団のメンバーであり、バロック・ヴァイオリンの名人でもある。



フロリアン・パウマン
(第2ヴァイオリン)
Florian Baumann
(2.Violin)

プレーメン州立フィルハーモニーのメンバー。



ユリウス・カルヴェッリ＝アドルノ
(第2ヴァイオリン)
Julius Calvelli-Adorno
(2.Violin)

デトモルト音楽大学で学ぶ。



マーティン・ナゴルニ
(第2ヴァイオリン)
Martin Nagorni
(2.Violin)

デトモルト音楽大学で学ぶ。



シュテファン・シュミット
(ヴィオラ、ソロ)
Stephan Schmidt
(Viola and Solo)

ウルリヒ・コッホ、ユルゲン・クスマウル両教授、ジュリアード弦楽四重奏団のサミュエル・ローズに師事。



マーティン・ペツチュ
(ヴィオラ、ソロ)
Martin Poetsch
(Viola and Solo)

デトモルト音楽大学で今井信子に師事。ベルリン・フィルのW. シュトレーレにも学ぶ。



ディートリヒ・シュナイダー
(ヴィオラ、ソロ)
Dietrich Schneider
(Viola and Solo)

デュッセルドルフ音楽大学で学ぶ。ケルン・ギェルツェニヒ管弦楽団メンバー。



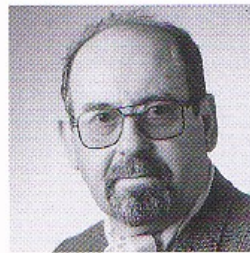
イレーネ・ギューデル
(チェロ、ソロ)
Irene Güdel
(Violoncello and Solo)

アンドレ・ナヴァラに師事。
デトモルト音楽大学教授。



アーミン・ローベック
(チェロ、ヴィオラ・ダ・ガンバ)
Armin Lohbeck
(Violoncello and Viola da Gamba)

デトモルト音楽大学でイレー
ネ・ギューデル教授に師事。
ボーフム大学で日本語を学
ぶ。ソロ、室内楽で活躍。1993
年3月から8月まで日本フィ
ルに在籍。



ヘルムート・ホフマン
(コントラバス)
Helmut Hofmann
(Contrabass)

カールスルーエ音楽大学教
授。カールスルーエ州立歌劇
場のソロ・コントラバス奏
者。



ゴットフリート・バッハ
(チェンバロ、オルガン)
Gottfried Bach
(Cembalo and Organ)

パーゼルのスコラ・カントー
ルム教授。レコードも数多
い。



ズザネ・ホプファー
(フルート)
Susanne Hopfer
(Flute)

ペーター・ルーカス=グラ
フ、アンドレ・ジョネ、オー
レル・ニコレに師事。ザルツ
ブルク音楽祭、ナポリ、ルツ
ェルン、アムステルダムなど
でソリストとして演奏。



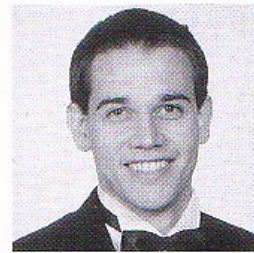
インゴ・ゴリツキ
(オーボエ、オーボエ・ダモレ)
Ingo Goritzki
(Oboe and Oboe d'Amore)

ヘルムート・ヴィンシャーマ
ン教授に師事。シュトゥット
ガルト音楽大学教授。スイス
のクラヴァース・レーベルか
ら多くのディスクをリリース
ス。



ヨン=ヒー・クワック
(オーボエ、オーボエ・ダモレ)
Yeon-Hee Kwak
(Oboe and Oboe d'Amore)

シュトゥットガルトでインゴ・
ゴリツキ教授に師事。1995年
ポーランドのウッジ・コンク
ール入賞、1996年パイロイト
国際コンクール第1位、1997
年東京の国際オーボエ・コン
クール東京入賞。



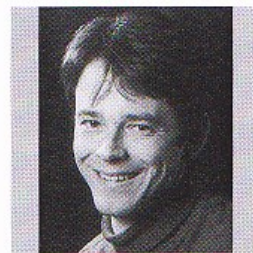
ニコラ・シュトルツ
(オーボエ)
Nikola Stolz
(Oboe)

シュトゥットガルト音楽大学
でインゴ・ゴリツキ教授に師
事。



ベアトリクス・リンデマン
(ファゴット)
Beatrix Lindemann
(Bassoon)

デトモルト音楽大学でヘルマ
ン・ユング教授に師事。



ヨハネス・ゾンダーマン
(トランペット)
Johannes Sondermann
(Trumpet)

1967年生まれ。デトモルト音楽大
学でゾマーホルダー教授に学ぶ。1992
年ハノーファー州立歌劇場第1ソロ
奏者に就任。1993年からは南西ドイ
ツ放送第1ソロ奏者を務める。ブ
ランデンブルク協奏曲第2番などの
協奏曲やオルガンとのリサイタルで
も活躍。プリメール・プラス・クイ
ンテット、SWF金管クインテット、
アンサンブルE13のメンバー。各国
でマスタークラスも行っている。



マックス・ゾマーホルダー
(トランペット、ホルノ・ダ・カッチャ)
Max Sommerhalder
(Trumpet and Corno da Caccia)

デトモルト音楽大学教授。



シュテファン・マイヤー
(トランペット、ホルノ・ダ・カッチャ)
Stefan Meyer
(Trumpet and Corno da Caccia)

デトモルト音楽大学でマック
ス・ゾマーホルダー教授に師
事。



白尾 隆
(フルート)
Takashi Shirao
(Flute)

桐朋学園とフライブルク音楽大学で学ぶ。林リリ子、森正、オーレル・ニコレ、アンドレ・ジョネ各氏に師事。1980年インスブルック響首席奏者就任。帰国後、ソロ、室内楽に活躍。1987年よりサイトウ・キネン・オーケストラに参加。武蔵野音楽大学非常勤講師。アンサンブル・ラミのメンバー。



平井好子
(オーボエ)
Yoshiko Hirai
(Oboe)

京都市立芸術大学およびデトモルト音楽大学で学ぶ。岩崎勇、ヘルムート・ヴィンシャーマン両教授に師事。リサイタル、室内楽に活躍。



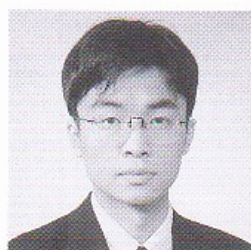
小山大作
(ファゴット)
Daisaku Koyama
(Bassoon)

東京チェンバー・ウィンズ、東京バッハ・バンドのメンバー。サイトウ・キネン・オーケストラに参加。



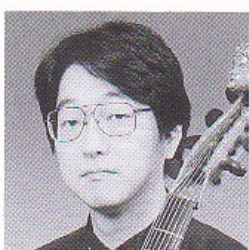
安江佐和子
(ティンパニ)
Sawako Yasue
(Timpani)

サイトウ・キネン・オーケストラに参加。桐朋学園大学非常勤講師。



武井英哉
(チェロ)
Hideya Takei
(Violoncello)

青木十良氏に師事。桐朋学園大学、同研究科で学ぶ。1998年アスペン音楽祭ヘスカラシップを得て留学。



櫻井 茂
(ヴィオラ・ダ・ガンバ)
Shigeru Sakurai
(Viola de Gamba)

東京芸術大学卒業。ヴィオラ・ダ・ガンバおよび古楽解釈、演奏法を大橋敏成氏に師事。毎年渡欧しヴィオラ・ダ・ガンバをドレフュス氏に学ぶ。コレギウム・アルジェントウム、ヴィオラ・ダ・ガンバ・デュオ「VOX ANGELI」を主宰。ドレフュス主宰のコンサート「PHANTASM」メンバー。上野学園大学および東京芸術大学講師。



都筑道子
(コントラバス)
Michiko Tsuzuku
(Contrabass)

国立音楽大学付属高校非常勤講師。ロイヤルチェンバーオーケストラ・メンバー。サイトウ・キネン・オーケストラに参加。



岡山バッハ カンタータ協会

Okayama Bach Kantaten Verein

1987年、岡山で活躍中の声楽家と合唱愛好家21名が、カンタータを中心としたバッハの合唱音楽の演奏を目的に結成。

日本を代表するバッハのスペシャリストである、佐々木正利氏を指揮者に迎えて現在に至る。佐々木氏の深いバッハ解釈に基づく、妥協のない的確な指揮の下、1992年に、初めての東京公演において、ソロも全て団員が受け持つゾリステン、と好評を博す。1993年には、ヴィンシャーマン指揮ドイツ・バッハゾリステンと「マタイ受難曲」を共演し、岡山での初演を果たした。

1994年、東京カザルスホールでの演奏会（指揮・佐々木正利）では、「真摯で正攻法の演奏」「明快なフレージングとはっきりとしたドイツ語発音による豊かな表現力」（音楽現代'94、12月号）と、高い評価を獲得。1995年には東京サントリーホールに於て、同じヴィンシャーマン指揮ドイツ・バッハゾリステンと「ヨハネ受難曲」を共演。このライブCDが全国発売され、特に合唱が高い評価を受けた。（レコード芸術'97、2月号）1997年5月、ドイツ・オーストリーで演奏旅行を行い、ザルツブルク・モーツァルテウム管弦楽団と共演。聴衆に深い感動をもたらした。

地方都市を本拠とする、芸術性の高い本格的な合唱団として、今後の活躍がますます期待されている。



バーバラ・シュリック

(ソプラノ)

Barbara Schlick
(Soprano)

バロック期の作品の歌手として、ミシェル・コルボ、フィリップ・ヘレヴェッヘ、フランス・ブリュッヘン、ジギスヴァルト・クイケンらの指揮で国際的な活動を開始し、数年前からヘルムート・ヴィンシャーマンとも共演。最近5年間にバッハのカンタータ、マタイ受難曲、ヨハネ受難曲、クリスマス・オラトリオ、口短調ミサ曲など多くのレコーディングに参加。バロック作品に理想的な声の持ち主として高く評価されている。



ベルンハルト・ランダウアー

(カウターテナー、アルト)

Bernhard Landauer
(Counter-tenor, Altus)

オーストリア出身。ウィーン音楽アカデミーでクルト・エクヴィルツに師事。ルネ・ヤーコプス、キングズ・コンソート、トン・コープマン、トーマス・ヘンゲルブロック指揮フライブルク・バロック・オーケストラなどと活動。オーストリア、ドイツ、フランス、イスラエルの音楽祭をはじめ、多くのコンサートやオペラに活躍。レコーディングには、ビーバー、カヴァルリのソロ・カンタータ、J.S. バッハのミサ曲口短調がある。

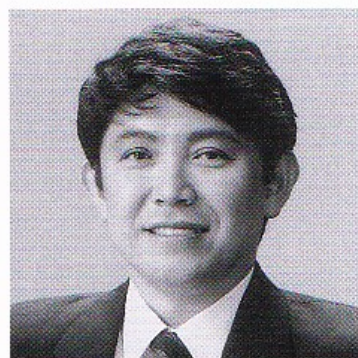


佐々木正利

(テノール、合唱指揮)

Masatoshi Sasaki
(Tenor and Chorus Conductor)

東京芸術大学、同大学院修士課程および博士課程修了。デトモルト音楽大学に留学。ドイツ・リート、オラトリオ、カンタータなどの宗教音楽を専門とし、特に日本を代表する「バッハ演奏家」として、1985年のザルツブルク音楽祭をはじめ内外で福音史家、テノール・ソロを務めて絶賛されている。合唱指揮者としても、盛岡バッハ・カンタータ・フェスティバル、仙台宗教音楽合唱団、岡山バッハカンタータ協会などで実績を挙げている。二期会会員。日本声楽発声学会理事。岩手大学教育学部音楽科教授。



河野克典

(バリトン)

Katsunori Kono
(Baritone)

東京芸術大学、同大学院、ミュンヘン音楽大学大学院で学び、ウィーン国立歌劇場研究員として研鑽を積む。1987年ジュネーヴ・コンクール第2位（1位なし）、ヘルトゲンボシュ声楽コンクール歌曲部門1位、ザルツブルク市賞など受賞。ザルツブルク音楽祭、ライン音楽祭などに出演、フランスのリヨン・オペラに度々出演など、ヨーロッパで高い評価を得ている。国内でも、小澤征爾、若杉弘、大野和士らの指揮するオペラ、定期公演や1995年のモーストリー・モーツァルト音楽祭に出演。ケルン在住。

F

プログラム

11月13日 狛江●November 13 KOMAE

J. S. バッハ Johann Sebastian Bach (1685-1750)

ブランデンブルク協奏曲 第5番 ニ長調 BWV 1050

Brandenburg Concerto No. 5 in D major, BWV 1050
for flute, violin, cembalo concertato and strings

Allegro—Affettuoso—Allegro

ズザネ・ホプファー(フルート)

Susanne Hopfer, flute

マリエッタ・クラツ(ヴァイオリン)

Marietta Kratz, violin

ゴットフリート・バッハ(チェンバロ)

Gottfried Bach, cembalo

2つのヴァイオリンのための協奏曲 ニ短調 BWV 1043

Concerto in D minor, BWV 1043
for 2 violins, strings and basso continuo

Vivace—Largo ma non tanto—Allegro

マリエッタ・クラツ(ヴァイオリン)

Marietta Kratz, violin

ヴォルフガング・クスマウル(ヴァイオリン)

Wolfgang Kussmaul, violin

—*—*—

オーボエ・ダモーレ協奏曲 イ長調 BWV 1055R

Concerto in A major, BWV 1055R
for oboe d'amore, strings and basso continuo

(Allegro)—Larghetto—Allegro ma non tanto

ヨン・ヒー・クワック(オーボエ・ダモーレ)

Yeon-Hee Kwak, oboe d'amore

フルート、オーボエ・ダモーレとヴァイオリンのための協奏曲 ニ長調 BWV 1064R

Triple Concerto in D major, BWV 1064R
for flute, oboe d'amore, violin, strings
and basso continuo

(Allegro)—Adagio—Allegro

ズザネ・ホプファー(フルート)

Susanne Hopfer, flute

ヨン・ヒー・クワック(オーボエ・ダモーレ)

Yeon-Hee Kwak, oboe d'amore

マリエッタ・クラツ(ヴァイオリン)

Marietta Kratz, violin

イレネ・ギュデル(チェロ)

Irene Güdel, violoncello continuo

ヘルムート・ホフマン(コントラバス)

Helmut Hofmann, bass

ゴットフリート・バッハ(チェンバロ)

Gottfried Bach, cembalo

G

プログラム

11月18日 仙台●November 18 SENDAI

11月20日 盛岡●November 20 MORIOKA

11月22日 岡山●November 22 OKAYAMA

11月23日 東京●November 23 TOKYO

J. S. バッハ Johann Sebastian Bach (1685-1750)

ミサ曲 ロ短調 BWV 232

Mass in B minor, BWV 232
for 2 sopranos, alto, tenor, bass, 2 choirs,
2 flutes, 3 oboes, 2 oboi d'amore, 2 bassoons,
3 trumpets, timpani, corno da caccia, strings and
basso continuo

Kyrie—Gloria—

—*—*—

Credo—Sactus—Agnus Dei

バーバラ・シュリック(ソプラノ)

Barbara Schlick, soprano

ベルンハルト・ランダウアー(ソプラノ、アルト)

Bernhard Landauer, soprano and alto

佐々木正利(テノール)

Masatoshi Sasaki, tenor

河野克典(バス)

Katsunori Kono, bass

仙台宗教音楽合唱団(合唱 11/18)

Sendai geistlicher Chor (Nov. 18)

盛岡バッハ・カンタータ・フェライン/盛岡コーロ・デラ・パーチェ(合唱 11/20)

Morioka Bach Kantaten Verein / Morioka Coro della Pace (Nov. 20)

岡山バッハ・カンタータ協会(合唱 11/22, 11/23)

Okayama Bach Kantaten Verein (Nov. 22 and Nov. 23)

(合唱指揮: 佐々木正利)

(Chorus Director: Masatoshi Sasaki)

ズザネ・ホプファー(フルート)

Susanne Hopfer, flute

インゴ・ゴリツキ(オーボエ・ダモーレ)

Ingo Goritzki, oboe d'amore

ヨン・ヒー・クワック(オーボエ・ダモーレ)

Yeon-Hee Kwak, oboe d'amore

マックス・ソマーホルダー(ホルノ・ダ・カッチャ)

Max Sommerhalder, corno da caccia

ベアトリクス・リンデマン(ファゴット)

Beatrix Lindemann, bassoon

小山大作(ファゴット)

Daisaku Koyama, bassoon

ヨハネス・ゾンダーマン(トランペット)

Johannes Sondermann, trumpet

マリエッタ・クラツ(ヴァイオリン)

Marietta Kratz, violin

イレネ・ギュデル(チェロ)

Irene Güdel, violoncello continuo

ヘルムート・ホフマン(コントラバス)

Helmut Hofmann, bass

ゴットフリート・バッハ(オルガン)

Gottfried Bach, organ

ヴィンシャーマンが世界に結ぶ音楽の輪

—— パリ・ユネスコホールでの『ミサ曲口短調』 ——

佐々木正利

■ 声楽家、合唱指揮者

かつて、チェロの巨匠パブロ・カザルスが「故郷カタロニアの鳥はピース・ピースと鳴くんだよ」と語りながら『鳥の歌』を演奏したパリ・ユネスコホール。以来、メニューイン、パヴァロッティやヘンドリクスといった超一流のみが出演を許されてきたこのホールでの演奏を、世界中の誰もが希望し憧れているというのに。

時は1998年1月12日午後10時40分、そのユネスコホール。会場のあちこちから「ブラボー、ブラボー！」の嵐と割れんばかりの拍手に包まれて、ステージ上にいるのは地方都市盛岡からの市民の合唱団、同じくハンガリーの地方都市からの交響楽団、そして国際オペラコンクールの入賞者で固められた、しかしバッハを歌うことがみな初めてという6人の国籍の異なるソリストたち。誠に信じがたい光景ではあったが、唯一違和感を感じさせなかったのが扇の要の指揮台の上。そこでは、この人でなければこの仕事はできるはずがない、と誰もが納得させられるマエストロが、両手を大きく広げて感謝の意を表していた。

ユネスコ本部と盛岡市が共催でバッハの『ミサ曲口短調』慈善演奏会を本年1月パリで開いた。佐々木の合唱団が欧州で高く評価されていたこともあって、私は音楽監督としてこの企画に最初から関わった。その最初の仕事は出演者選びである。

昨年、私はボンの御宅にヴィンシャーマン先生を3度も訪ねた。1度目は出演交渉に、2、3度目は音楽の打合せにである。演奏会がチャリティーのためギャラは一切無し。し

かもユネスコの性格上、できるだけ多国籍に及ぶ出演者が望ましく、かといって演奏レベルを落とすことは絶対に許されない。そのような制約のもとでこの大役をしっかりと取り仕切れる世界の顔といったならば、これはもう先生しかいないではないか。世界の人々の平和を音楽の輪で祈ることがライフワークの一つ、とおっしゃられる先生こそがふさわしいとは思いつつ、烏合の衆の危険性が高いまだ見ぬ共演者のレベルを案ずると、ご高名な先生にお願いすることが果たして良いのかどうか。緊張の面持ちで訪ねた私を待ち受けていたのは、案の定柔和な笑顔での「ササキサーン、一緒にやりましょう」であったことに、心のなかで思わず合掌した。

合唱指揮者としてヴィンシャーマン先生との共演は5回目になるが、先生は毎回必ず指示をビッシリ書き込んだスコアを事前に送ってこられる。その指示は、すべてのパートに実に木目細やかに行き渡り、またその筆致はバッハの手書きを見ているように分かり易く美しい。先生宅への2度目の訪問の後、ハンガリー・セゲッド交響楽団に先生の指示を伝えるべくウィーンに向かったが、その折託されたパート譜がまたすごかった。何しろすべてのブルト用に先生の丹念な手書き指示が（何とボーイングからアーティキュレーションまで）書き込まれていたのだから、これを見たならオケ団員も籐（たが）を締め直さねばなるまいと思ったものである。だがその気持ちとは裏腹に、音楽監督としての見通しの甘さから、オケやソリストに関して先生に多大な腐心をしていただくようになるとは、この



1998年1月12日、パリ・ユネスコホールにて。写真提供：盛岡国際平和コンサート実行委員会

時はまったく思わなかった。

今までにも増して、今回ほどヴィンシャーマン先生の実力と包容力に感謝したことはない。失意にめげず成功を心に描いて根気強く事を為し進めていくことの大切さも、改めて教わった。すなわち、——。

本番を数日後に控え、オケリハーサルのために、先生とともにブダペストからバスでセゲッドまで向かったが、そこで我々は二つの失意を味わうことになる。一つは、歌劇場を掛け持つオーケストラだったため、バッハを奏するのは十数年ぶりとのこと。如何に実力があっても（事実、その夜のオペラ公演の伴奏は実に見事だった）、奏法のまごつきは私にも分かるほどだったから、先生の内心は察するに余りある。そこにはバッハを初めて歌うソリストたちも来ているはずだったが、事情があって誰もいず、先行きへの不安は募るばかり。これが二つ目。だが先生は、苛立ちを隠せぬほどの重大事にも、温和な表情で辛抱強くオケをレッスンなさり、その練習は8時間にも及んだ。また、本番前日パリに勢揃いしたソリストたちには、ピアノレッスンを丹念に積み重ね、彼らの表情から、不安が消え去るのにさほど時間はいらなかった。

常日頃、楽譜を丹念にお読みになられる先生が、「ササキサーン、楽譜を読むんじゃなくて音楽を読むんだよ」とおっしゃる。そして続けて「音楽を読むんじゃなくて人間を読むんだよ」とも。作曲者と演奏者が時空を超えて語り合う精神の発露は、いつ如何なる場合にも同じとは限らない。音楽のなかに様々な人間模様を織り込む先生の仕事が、ドイツ・バッハゾリステンを集わせ、世界の高みに引き上げたことが、今回のお付き合いで本当によく分かった。

パリでの口短調ミサ。参加者の国籍は、ドイツ、アイルランド、エストニア、アメリカ、ロシア、ポーランド、イタリア、ハンガリー、フランス、中国、日本と実に11ヶ国にも及んだ。それら異なった文化で育った人たちがヴィンシャーマン先生のタクトのもとで微妙に溶け合い、この世のものとは思えない美しい響きを作り出したのだ。とある街角の小さなレストランで食事をとられる先生一家のつつましさやかさと温かさ。カーテンコールで呼び出された一合唱団員の晴れやかな笑顔が、ヴィンシャーマン先生の音楽の根底を物語ることに異議を唱える人は誰もいない。

 KAJIMOTO CONCERT MANAGEMENT CO., LTD.